

令和 4 年 6 月 10 日現在

機関番号：15501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19K02041

研究課題名(和文) 天皇実写映画の上映・鑑賞様式に関する歴史社会学的研究

研究課題名(英文) Historical sociological study on the screening and viewing mode of the emperor's film

研究代表者

右田 裕規 (MIGITA, Hiroki)

山口大学・時間学研究所・准教授

研究者番号：60566397

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 600,000円

研究成果の概要(和文)：20世紀の日本社会において、天皇家に関連する出来事をニュース映画として映像化・商品化する経済主体の動向は、人びとのナショナル・アイデンティティ編成にとってどのような契機を構成していたか。本研究では、この問いについて社会学的な視点から調査分析を行った。この作業を通じて、映画媒体による天皇体験の拡がりや、君主制ナショナリズム形成にとって反撥的に作用したことをあきらかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

社会学や歴史学の研究史では一般に、20世紀の映画会社や新聞社やテレビ局が公開した皇室関連のニュース映画・映像は、天皇家をシンボルとした国民的帰属意識の喚起と編成に大きくくみした媒体であったとかがえられてきた。対して本研究では、20世紀の天皇実写映画の上映・鑑賞の微視的相貌について調査と検討を加えることによって、ニュース映画やテレビを媒介した複製的で間接的な皇室体験の定着が、むしろ天皇家の民族的シンボル性が社会的に捨象・閑却される事態へと帰結したことをあきらかにした。

研究成果の概要(英文)：What kind of opportunity did the trend of economic agents to visualize and commercialize events related to the Emperor's family constitute the formation of people's national identity in Japanese 20th century? In this study, we investigated and analyzed this question from a sociological point of view. Through this work, it became clear that the expansion of the emperor's experience through the movie medium had a repulsive effect on the formation of monarchical nationalism.

研究分野：社会学

キーワード：ナショナリズム

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

近代君主制国家において、王室のイベントを撮影・上映する映画(映像)産業の経済運動が活発化していった歴史的経緯に関しては、社会学や歴史学、文化研究の領域で多くの研究の蓄積がある。それら内外の先行研究では一般に、この経済活動は、国土に住まう膨大な数の民衆が、君主一家のイベントに参画することを可能にし(つまり国土全域にわたる巨大な儀礼的空間を構築し)君主をシンボルとしたナショナル・アイデンティティの構成に大きく与ることになったと見なされている。しかしながら、複製商品を媒介した国民的儀礼空間の編成、国民的な沸騰の発現、国民的連帯の醸成、というこの種の儀礼論的構図が理論的になり立ちがたいことは、複製的視覚体験の外在的・脱文脈的性質を扱った研究群によって間接的に呈示されている。知覚文化史や複製技術論の古典的知見にしたがうと、近代に登場した諸々の視覚的複製技術(産業)は、被写体それ自体を大量生産商品へと再編し、被写体の固有の価値や意味を剥奪する傾性を原理的に含んできたからである。わけでも映画媒体では、被写体そのものを、抽象された脱文脈的・商品的な対象として観衆へと呈示するこの複製媒体の特性が、とくに際立って発現すると、知覚文化史の領野ではかんがえられている。本研究は、(とくに日本の事例研究では看過されがちだった)視覚文化史の以上のような知見を参照しながら、君主一家のイベントの映像化と商品化の進展が、人びとの国民的アイデンティティ形成とどう関連しあってきたのかについて、20世紀日本社会を事例にとり再検討を行うことを目指したものである。

2. 研究の目的

本研究では、上述の問題意識のもと、とりわけ次の2つの問いについて回答することが目指された。

問い(1) 天皇家の実写映画は、どのような文化的条件に従いつつ、どのような表現手法のもとに製作され、またどのような規模と形式で上映されていたか。

ここでは、20世紀の映画会社・新聞社・テレビ局が、天皇家の出来事群の映像を商品化していった歴史的経緯について調査分析した。たとえば皇室実写映画の内容や形式に、製作主体の商業的企図がどのように反映していたか。上映の現場では、一連のフィルムはどのようなプログラム構成のもと、どのていどの期間上映されていたか。このような問題群について、同時代の文化状況や内務省・文部省・宮内省など関係当局の動向と絡めながら検討を行い、メディア産業の商業主義にもとづいた皇室実写映画の製作・上映が、皇室の民族的シンボル性を毀損する契機を含みながら進められていた可能性について考察を行った。

問い(2) 同時代の人びとは、皇室実写映画をどのような仕方で鑑賞し、またそれらの映画から天皇家やネーションに対するどのような心性を喚起されていたか。

ここでは、20世紀はじめから20世紀半ばの人びとが、天皇家のイベント映像をどのような仕方で観覧・消費していたか、その具体的な形象について検討を行った。たとえば当時の人びとはどのていどの頻度で皇室関連のニュース映画を観覧していたか。皇室実写映画の観覧時に警察機構や映画会社側が強制・要請した儀礼的営みに対して、かれらはどう応じていたか。かれらは一連のイベント映像からどのような意味や印象を読みとり、またその意味や印象の読みとり方は、どのように歴史的に変化してきたか。このような問題系についての調査分析を通じて、天皇家の出来事群の映像の大量流通という事態が、同時代人たちの民族的帰属意識の編成にとってどのように作用していたのか、かれらの意味世界に即して考察を行った。

3. 研究の方法

上記(1)の問いについては、ニュース映画のデジタルアーカイブ・DVD、映画雑誌記事、新聞記事、映画・新聞・テレビ業界関係者や関係当局者たちの回想録を中心に資料調査を行なった。皇室実写映画の表現様式の詳細、各映画の動員数、撮影・上映現場の状況やその背景、皇室映像に対する諸々の規制や介入についての記述が頻出する一連の資料の探索を通じて、皇室実写映画の製作・上映現場の具体的で微視的なありようと、そこに含まれた商業主義的な思惑について通時的に把握した。上記(2)の問いについては、同時代人の日記類・回想録、新聞社の上映関連記事、新聞・映画・テレビ関係者の証言類、当時の行政や学者の手になる意識調査・世論調査報告を中心に資料調査を実施し、同時代人たちがどのような態度で皇室のイベント映像を観覧していたか、あるいは一連の映像からどのような意味を汲みとっていたのかにまつわる記述・数字の収集を進めた。また上記2つの作業と並行して、映画をはじめとした視覚的複製と君主制ナショナリズムの結びつきについて論じた先行研究群、ならびに複製的体験の特徴を扱った研究群の批判的な解釈作業を行い、本研究の理論的枠組みの精緻化を進めた。

4. 研究成果

本研究で得られた知見は次の2点にまとめられる。

第1に、20世紀における皇室実写映画の製作・上映のありかたは、天皇家の民族的シンボル性を稀釈する、「不敬」な契機をしばしば含んでいたという点。たとえばそれは次のような諸点

において端的に見いだされるものである。昭和の戦時期を含め、20世紀前半の天皇家のニュース映画は、一般の娯楽映画やアニメーションなど他のフィルムと混合的に上映されるのが一般的であったこと（上映の現場では、他の被写体（つまり臣民）と同質的な対象として天皇家を呈示するプログラム構成が定例的に採用されていたこと）。併映フィルムの上映時間への配慮から、天皇家のニュース映画は通常、極端に短く編集されたため、「鹵簿ガ肅ヲトシテ進ミ行ク光景ヲ見ル能ハザルタメ、随ッテ感激ノ心地ヲ生ゼザルコトハ残念ナリ」（昭和の大礼時の神戸の実業家の感想）というような感覚を見る者に惹起する、慌ただしい光景がフィルム内ではしばしば展開されていたこと（そのため、公定の教義に忠実にしたがって、スクリーン上の天皇を文字通り「礼拝」しようとする地方の観衆が集った上映場では、天皇の姿が「十分に眼に止まらず、二度も謹写」するようなケースも見られたこと）。都市の映画館では、（上映時間を短縮し1日当たり興行回数を増やす方途である）フィルムの早廻しを、皇室実写映画にもそのまま適用したせいで、「むやみに廻轉を早める結果スクリーンの陛下はコセコセと歩まれる」というような場面が、上映の現場ではしばしばあらわれていたこと。1930年代を契機として、（皇族の動静を伝えるニュース映画内で、電柱に貼られた「味の素」の広告が脈絡なく大写しになるというような）広告性を皇室実写映画がおびはじめ、さらに1950年代から60年代になると、皇室イベントのニュース映画・テレビ中継では、この種のタイアップやスポンサーCMの挿入が常態化すること（複製産業が提供する皇室イベント体験から、民族的な意味連関が剥落し、そのかわりに商業イベント的な相貌を色濃くまとった形式において皇室イベントが観衆へと呈示されはじめること）。大正・昭和初期の新聞社や映画会社は、天皇家の出来事を映したニュース映画を、「際物」として位置づけ、イベント前後の短期間に限って公開を行っていたこと。内務省が、皇室とその出来事の「國體」的意義や尊厳を保持すべく、皇室実写映画の撮影・上映主体に対して課したさまざまな制限・干渉・介入はむしろ、皇室イベント映像の紋切り型化・定型化をまねき、被写体である皇室イベントの反復性・凡庸性を見る者に一層強く感受させる方向へと作動したこと。こうした一連の事実、皇室の映像を商品化する経済主体の運動が、固有の意義を失った、凡庸な商品の群れの一部として被写体を人びとへと呈示する、大量複製技術の原理的傾性にしたがいながら展開されていたこと。1910年代から戦後に至るまで、皇室実写映画が、天皇家（の出来事群）から固有の特別な価値や象徴作用を剥奪し、かれらとその出来事を凡庸化・戯画化するような形式のもと、製作・上映され続けていたことを端的に指し示したもとして位置づけられる。

第2に、以上のような製作・上映のありようと照応して、20世紀の観衆たち、とくに都市の観覧者たちの間では、映像化された皇室イベントから、特別な質や意味をくみとる鑑賞態度が、時を追うごとに後景化していった、という点である。たとえば警察を主体とした頻繁な指導と監視にもかかわらず、都市においては、スクリーン上の天皇家に脱帽し敬意を表する儀礼的営みは、戦時期に至るまでなかなか定着しなかったこと、そのかわり、他の娯楽フィルムの登場人物に対するのと同様、天皇家の人びとがスクリーンに登場すると「拍手喝采」をもって迎える種類の態度が、1930年代後半に至っても都市部ではしばしば見られたこと、昭和初期に実施されたいくつかの大規模な「國體觀念」調査では、皇室のニュース映画によって「國體の有難さ」を体感したという回答者の割合は、寡少な水準にとどまっていたこと、等々は、スクリーンに映し出された皇室とその出来事の固有の民族的意義が、観衆たちの意味世界ではしばしば無効化していたこと（他の被写体と同質的な対象、刹那的な消費の対象として天皇家とそのイベントが知覚・体験されていたこと）を端的に物語る事実群として解される。わけでも重要視されるのは

天皇その人やイベントのオリジナルを見るよりも、映画・映像での複製的な天皇体験を選好する態度が、20世紀の人びとの間ではしばしば見うけられたことである。このような複製選好的態度については、1959年4月10日の皇太子成婚パレードにおいて、沿道に住むテレビ受像機保有世帯の大半が、テレビでのパレード体験を選び取っていたことを精緻に明らかにした高橋徹らの調査報告をつづいてよく知られているが、この種の態度がひろがりはじめた時代は、さらに遡ることが可能である。たとえば大正大礼の鹵簿を撮影した映画会社の速報フィルムが高い集客力を発揮したのが何よりも、当の即位礼の開催地であったことは、複製的・映画的な皇室体験をえり好む態度が、相当早い時点からからひろがっていた可能性を示した事実の一つにあげられる。また、大正・昭和初期の新聞社が、行幸啓のニュース映画の速報を、当該の行幸啓地で優先的に行っていたのも、このような観衆側の複製選好に上映主体が応じた結果である。さらに、

昭和初期の親閲式や行幸啓の「奉拝」に参画した各地の中等学校・高等学校生徒による記念文集において、映画的な修辭が頻出すること（たとえば「オートバイ、自動車、白服をお召しになつた現つ神ひらめく國旗がフィルムの様に移つて行く」など）、イベント時に実際に目撃した天皇に対して「模像」的表現を用いた「感激文」が多数見うけられること（「陛下の御尊影をまのあたり拜し」「聖天子の御姿は我々の眼に今現實の尊き御影として映じぬ」など）もまた、当時の都市住人たちの複製体験志向を反動的に表した事実として注目される。天皇家の人びとや出来事を実際に目撃・体験する稀少な機会を得たにもかかわらず、映画媒体を通じた事後的な体験を好む（もしくは実際に目撃・体験したにもかかわらず、その出来事を映画的かつ複製的に知覚・想起する）というこの態度の拡がりは、映画媒体を通じた皇室体験の社会的定着が、天皇家の諸々の出来事がふくむ特別な時間性を捨象・看過する態度。次々に生起しては短期的に忘却される無数の商業イベント群＝商品群の一つとして皇室イベントを体験する態度の社会的定着と同義的であった可能性を指し示している。

本研究では、以上の2点をつまびらかとすることで、被写体である天皇家とその出来事の民族的シンボル性や異質な時間性（儀礼論的時間性）を捨象する、反-国民統合的な形式のもと、20世紀の天皇実写映画・映像が上映・鑑賞されていた可能性について、一定の理論的・資料的裏づけを行い得たと考える。いいかえると本研究は、映画媒体を通じた天皇体験の拡大という史的場面のうちに、国民統合的な契機を一元的に読みとってきた研究史上の有力な解釈枠組みに対して、複製技術を媒介した体験・知覚がはらむ脱文脈的・外在的・反復的な特性を重視しながら、理論的・実証的な反駁を部分的に加えた試みとして位置づけることができる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 右田裕規	4. 巻 294号
2. 論文標題 近代都市民衆の天皇実写映画の鑑賞体験	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 新しい歴史学のために	6. 最初と最後の頁 42-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 右田裕規	4. 発行年 2020年
2. 出版社 吉川弘文館	5. 総ページ数 261
3. 書名 近現代の皇室観と消費社会	

〔産業財産権〕

〔その他〕

みらいぶっくー学問・大学なび https://www.miraibook-research.net/theme/12422/

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------